

候補一本化選挙戦略の検討

—— 2010 濟州道知事選挙を事例に ——

金 東 煥

- I. 問題提起
- II. 2010 濟州道知事選挙の過程と結果
- III. 民主党・国民参与党・民主労働党の候補一本化
- IV. 結果と分析

I. 問題提起

1. 問題提起

この論文は、1987年の韓国民主化以降、行われてきた選挙における候補一本化戦略の有効性を検証する。韓国選挙政治において、選挙協力は主に人物・地域中心の連帯であった。87年、大統領選挙では民主化陣営の金泳三と金大中の候補一本化が試みられたが、失敗し、結局、軍部出身候補である盧泰愚が当選することになったし、92年には、盧泰愚、金泳三、金鍾泌の三党合同により、金泳三が大統領に当選した。97年には、金大中と金鍾泌は「DJP」という選挙連合を組んで、金大中が大統領に当選、2002年にも、盧武鉉が鄭夢準と候補一本化し、勝利をおさめた。2010年、地方選挙においても、反ハンナラ党候補一本化戦略が展開され、野党である民主党が勝利した。地方選挙においても、候補一本化戦略が有効性を有することが分かる。2010年の地方選挙の場合、人物・地域ではない、政党間の候補一本化・政策連帯を中心として候補一本化が行われたことが特徴的である。

2010年に行われた全国地方選挙の場合、現政府に対する中間評価的な性格が強かった選挙環境の下に、大統領・政府与党に対する有権者の回顧的・審判的投票行動が働き、野党である民主党が勝利を取った。そして、野党の選挙戦略としては候補一本化という戦略が主に使われ、民主党勝利の一因として評価されている。

反ハンナラ党勢力の結集と政策連帯を中心とする候補一本化戦略の有効性はここで確認できるし、2012年の国会議員選挙と大統領選挙においても展開される可

能性が高い。

しかし、濟州道では、民主党を中心とする候補一本化が行われたにもかかわらず、この勢力は敗北してしまった。その原因に注目したい。濟州道は、韓国政治において最も重要な争点である地域主義的性向とは異なる政治的特性をもっている地域であり、特殊な選挙構図の中で行われた知事選の結果分析は特別な意味があると思われる。

2. 候補一本化戦略の有効性

本論文は、選挙戦略において、候補一本化戦略の有効性を検討する。2007年大統領選挙においての大勝に相次ぐ国会単独過半数獲得でハンナラ党は行政・立法を掌握した強力な与党として誕生した。その一方、野党側は、民主党が、民主党と国民参与党に、民主労働党が民主労働党と進歩新党に、そして創造韓国党に分裂してしまう。野党勢力の分裂とともに与党に対する選挙連合の必要性が提起され、2010年、初めて地方選挙においても反ハンナラ党野党候補一本化が進められた。

民主党、民主労働党、創造韓国党、進歩新党、国民参与党などの5野党は「希望と代案」、「市民主権」、「2010連帯」、「民主統合」などの市民4団体とともに「民主主義後退、民生破綻、平和危機」とハンナラ党政権の政策を批判し、「健全な地方自治を回復する」として選挙連合戦略を進めてきた。政党の利害関係が先鋭した選挙空間という悪条件の中で5野党は党利党略を乗り越え、未曾有の政治実験を始めたのである。分裂してしまった野党側の選挙戦略としての候補一本化は結局ハンナラ党との1対1の構図形成を主な目的とする。2010年地方

選挙においては政権安定論より政権審判論に共感する国民が多く、ハンナラ党の候補支持の35.7%より野党単一候補を選ぶと答えた国民が48.0%と多かった¹⁾という世論調査結果からも分かるように、進歩大連合という形を形成することは巨大な保守与党であるハンナラ党に勝てる最も有効な選挙戦略として提起されてきたのである。

II. 2010 済州道知事選挙の過程と結果

1. 道知事への関門： 党公認の力学

選挙において、候補者公認過程は「政党内部の権力闘争過程であり、結果である²⁾」。候補者公認過程の特性はその政党の権力関係の特性を反映するとみるべきである。ひいては、政党権力関係の変化は候補者公認過程の変化を導き、逆に候補者公認過程の主要な特性変化は政党の権力構造の変化を加速化させよう。特に、有力政党の候補として公認されるのは当選に近づくことを意味するため、候補者公認過程こそ長い選挙過程の白眉であることが確認できる³⁾。

今回の選挙戦では最終的に3人の候補者が立候補した。しかし、彼らの出馬過程は平坦ではなかった。選挙運動は公職選挙法により選挙日の13日前である5月20日から6月1日までである。ここでは、現職知事の不出馬宣言、立候補した3人の公認争い・出馬過程など、6月2日の投票日までの過程を人物中心に説明する。

(1) 金泰煥⁴⁾ (キムテファン) 現職知事の不出馬宣言

低い支持率にも関わらず現職の優位性をもって3選に挑戦するのではないかという観測が優勢だった金泰煥が2010年2月17日に不出馬を宣言した。その理由は何よりも低い世論調査の支持率である。住民召還投票以後の各種世論調査において15%台の低い支持率しか得られなかったことが3選挑戦を諦めるしかなかった要因として観測される。

金泰煥の不出馬宣言は、現職プレミアムというメリットが働かない形で選挙戦が進むということに政治的意味がある。済州地域の場合、95年から知事選が行われてきたが、現職候補者が出馬した3回の選挙戦の中、2回が現職候補者の勝利であり、現職広域団体長の当選率は1998年に80.0%、2002年に87.5%、2006年に88.9%であって⁵⁾、これは現職プレミアム理論を裏付けている。

(2) 禹瑾敏⁶⁾ (ウグンミン) 元済州道知事の民主党復党・無所属出馬

6.2 済州道知事選挙において、世論調査1位を記録してきた、無所属の禹瑾敏が2010年3月3日に民主党へ復党した。禹瑾敏は2002年に民選3期目の道知事に当選した後、任期中であった2004年4月27日に虚偽事実流布による選挙法違反で罰金300万ウォンの刑が大法院で確定し、知事職を喪失した。また同時に党員資格が停止されたが、それ以来5年10ヶ月ぶりに公式の民主党員となった⁷⁾。

禹瑾敏の民主党復党には2つの理由があると思われる。まず、民主党支持層に対する働きかけである。禹瑾敏は1998年・2002年の知事選においても民主党公認で当選した。また、最近行われた2004年・2008年国会議員選挙においても済州道の3つの議席を民主党が全て獲得するなど、比較的安定した支持層を有しているのが分かる。2番目は、民主党予備候補者である高喜範の脆弱な支持率である。世論調査で圧倒的な優位を占めていた禹瑾敏が民主党公認を得て、当選の可能性を高めようとするのは当然として、他方、高喜範の競争力に対する不信感を隠せなかった民主党中央にとっても、これは必勝カードとしての抜擢であった。

しかし、禹瑾敏の復党によって、民主党は全国的な批難の対象になった。禹瑾敏のセクハラ前歴⁸⁾がその理由であった。全国の言論団体、女性団体、市民団体のみならず、民主党内の指導部・党員からも批難を受けた。特に、民主党の済州道知事の予備候補者であった高喜範は、当選可能性だけを評価した民主党の指導部に道徳性に関する問題を提起した。この問題提起については後述する。

「セクハラ容認政党」という批判に直面した民主党は結局、3月17日に禹瑾敏に関するセクハラ問題は民主党公認候補者としての道徳性と資質に大きな欠格事由と認められるという理由で「候補者不適格」と判定を下した⁹⁾。かくして、禹瑾敏は3月19日に離党及び無所属出馬を宣言することになった。セクハラ前歴が本格的に問題視されて以降のハンギョレ新聞世論調査では禹瑾敏が33.6%を、姜相周が32.9%の支持率を記録し¹⁰⁾、「禹瑾敏大勢論」が揺れる様子を見せはじめ、民主党公認が重要な条件だった禹瑾敏だが、仕方ない選択であったといえよう。

(3) 高喜範¹¹⁾（コヒボム）元ハンギョレ新聞社長の民主 党公認確定と候補一本化

高喜範元ハンギョレ新聞社長は2010年1月13日に民主党に入党し、2月1日に道知事出馬を宣言した。民主党公認をめぐる戦いあう禹瑾敏に対して世代交代論¹²⁾を唱えながら、道徳性、アイデンティティ、党に対する寄与度に基づき、候補資格を問題視し始めた。金泰煥の不出馬宣言以降には、30%から40%に達している禹瑾敏の当選可能性に対してこれを牽制するための戦略として世代交代論を浮上させ、この流れに乗って、禹瑾敏に政界引退を求めた。

3月3日になされた禹瑾敏の民主党復党についても、済州道党とまったく協議のない、道民と民主党員を無視した態度であると批判した。そして、禹瑾敏のセクハラ・選挙法違反前歴に関する道徳性を問題視して、復党審査・候補資格審査・公認審査委員会の徹底した審査を要求した。しかし、3月7日に党員資格審査委員会からの復党決定という通報を受け、やがて、禹瑾敏の復党をめぐる禹瑾敏と民主党間に密約があったという密約説まで提起しながら、民主党指導部と禹瑾敏を批判し、ついに3月9日から無期限絶食に突入した。民主党は結局、3月17日に禹瑾敏に対して「候補者不適格」判定を下し、高喜範は3月17日に絶食を終え、4月22日に民主党公認候補者として確定した。

高喜範は民主党候補者になった後、民主労働党候補の玄愛子（ヒョンエジャ）前国会議員と国民参与党候補の吳玉晩（オオクマン）道党委員長との野党単一候補協議を通じて、5月10日に野党単一候補となった。

(4) 玄明官¹³⁾（ヒョンミョンカン）サンソン物産顧問 のハンナラ党の公認確定・無所属出馬

2010年3月18日に、ハンナラ党の玄明官は経済発展を率いる道知事になりたいという意思の表明とともに6.2済州道知事選への出馬を宣言した。2006年の知事選において落選し、今回の選挙にはあまり出馬意思がなかった玄明官が他の候補者に比して遅く出馬を宣言した理由は、現職知事の不出馬宣言以来、大勢論を唱えた禹瑾敏のセクハラ前歴と離党による選挙構図は自分にとって有利な選挙構図になると判断したからだと思われる。

こうして、ハンナラ党の道知事候補者選出は玄明官・姜相周・姜宅相（カンテクサン）前済州市長・高桂秋（ゴゲチュ）前済州開発公社社長の4人の対決となった。ハ

ンナラ党の場合、誤差の範囲内ではあるが、公認が決定されれば禹瑾敏に勝てるという世論調査発表があり¹⁴⁾、ハンナラ党の票結集効果が現れることが分かる。

4月27日に行われたハンナラ党の候補者選出は世論調査と国民選挙人団の投票で進み、総投票数959票（得票率37.3%）で玄明官がハンナラ党公認候補者となった。姜相周は810票（31.5%）、高桂秋は479票（18.6%）、姜宅相は322票（13.8%）であった。

玄明官はハンナラ党の公認候補者として本格的に選挙戦に臨んだ。ハンナラ党の票結集効果のおかげで、5月6日のKBS済州世論調査で38%の支持率で23.5%の無所属禹瑾敏に14.5%の差でリードする結果が出た。しかし、彼は結局、無所属で立候補することになる。その理由は5月7日の事件のためだ。

済州西歸浦警察署は5月7日に、玄明官ハンナラ党候補者の弟である玄〇〇（57歳）を公職選挙法違反の疑いで緊急逮捕した。警察によると玄〇〇は西歸浦の〇ホテルで選挙運動員に金品（2,500万ウォン）を渡ろうとしたということである。結局、玄〇〇は5月10日に拘束され、5月11日にハンナラ党の中央党は玄明官候補者に対して公認資格剥奪とともに済州地域にはハンナラ党の公認候補者の擁立をさせない方針を示した。

しかし、玄明官は公職選挙法の第57条2項により公認候補者として選ばれた者が辞退、死亡あるいは党籍の離脱、変更などを事由にその資格を喪失した場合には出馬できるという規定に基づいて5月12日に離党し、14日に無所属として出馬を宣言した。

一方、ハンナラ党の無公認に対して持続的に次点者公認を求めてきた姜相周は党の方針に反発し、5月12日にハンナラ党を離党し、無所属で出馬することになる。

こうして、6.2済州道知事選挙は民主党の高喜範、無所属の姜相周、無所属の玄明官、無所属の禹瑾敏の4者対決構図で始まった。

この4者対決構図の中で行われた世論調査では、禹瑾敏27.8%、玄明官19%、高喜範16.8%、姜相周13.3%（ニューシス世論調査、2010年5月16日）、禹瑾敏28.4%、玄明官22.2%、姜相周19.3%、高喜範15.5%（ハンギョレ世論調査、2010年5月16日）、禹瑾敏29.9%、玄明官19.9%、高喜範15.4%、姜相周11.7%（東亜日報世論調査、2010年5月17日）を記録し、玄明官の弟の事件以後に禹瑾敏と玄明官の支持率が逆転した。特に、ニューシス世論調査では「玄明官の弟の選挙法違反による拘

東が選挙に影響があるでしょうか」という質問に「ある」と答えた人が75%にも達し、この事件の影響が相当であったということが分かる。

支持率下落に危機感を感じた玄明官と姜相周はハンナラ党の支持票の結集を狙い、5月22日に候補一本化に合意し、5月24日に世論調査によって結局、玄明官が単一候補となった。

こうした紆余曲折を経た6.2 濟州道知事選挙は民主党の高喜範、無所属の玄明官、無所属の禹瑾敏という3者構図に再編された。

表1 世論調査（候補者支持率）

	高喜範	玄明官	禹瑾敏	姜相周	金泰煥
2009. 9.30	2.0	15.2	11.4	5.0	9.7
2009. 10.2	3.5	17.6	20.9	13.9	12.6
2009. 10.15	3.7	14.2	21.9	11.7	14.4
2009. 12.31	3.5	—	16.3	20.5	14.6
2009. 12.31	4.3	—	31.2	13.9	15.9
2010. 1.3	—	—	42.9	24.2	18.9
	—	—	57.7	—	26.1
2010. 1.19	—	—	41.3	—	19.4
	16.5	—	33.1	24.0	—
	17.0	—	37.0	—	15.0
2010. 2.12	7.5	—	30.5	15.9	13.8
2010. 2.13	6.0	—	25.3	10.3	12.7
2010. 3.16	—	—	33.6	32.9	—
2010. 3.30	5.8	14.6	20.1	14.7	—
2010. 4.21	5.8	19.5	22.2	14.5	—
	13.3	—	31.3	35.1	—
	15.3	34.4	32.8	—	—
2010. 5.3	14.5	37.8	26.3	—	—

2010. 5.3	10.7	36.8	29.3	—	—
2010. 5.3	15.9	39.0	31.6	—	—
	11.0	38.4	27.2	—	—
2010. 5.6	12.5	38.0	23.5	—	—
2010. 5.10	10.7	28.7	27.0	—	—
	12.3	29.5	31.2	—	—
2010. 5.16	16.8	19.0	27.8	13.3	—
2010. 5.16	15.5	22.2	28.4	19.3	—
2010. 5.17	15.4	19.9	29.9	11.7	—
2010. 5.17	—	19.2	30.8	—	—
2010. 5.17	16.9	17.3	27.7	12.2	—
2010. 5.19	14.8	24.1	27.2	15.4	—
2010. 5.19	16.1	20.1	31.8	12.4	—
2010. 5.23	18.5	29.8	39.8	—	—
	18.4	—	42.5	21.9	—
2010. 5.27	11.8	31.4	34.2	—	—
2010. 5.27	18.5	27.5	35.4	—	—
2010. 5.27	16.7	31.5	34.8	—	—
2010. 5.27	12.8	39.4	34.6	—	—
2010. 5.28	11.7	31.4	32.5	—	—

表2 世論調査（政党支持率）

	ハンナラ党	民主党	民主労働党	国民参与党	支持なし
2009. 9.30	21.2	19.2	3.2	—	44.6
2009. 10.2	27.8	34.7	8.5	—	—
2009. 10.15	26.7	25.7	3.5	—	40.7

2009. 12.31	35.6	18.4	1.3	1.0	21.3
2010. 1.3	30.9	35.7	4.4	—	19.1
2010. 3.30	25.6	20.8	5.6	1.8	41.7
2010. 5.3	42.9	28.6	8.1	3.5	12.9
2010. 5.6	40.0	24.0	6.4	2.9	—
2010. 5.10	32.4	27.9	4.1	2.9	26.3
2010. 5.13	29.4	24.9	4.7	2.0	—
2010. 5.16	32.6	27.8	5.3	3.4	—
2010. 5.17	34.7	29.4	6.2	3.7	19.2
2010. 5.17	30.5	26.5	—	—	36.2
2010. 5.17	31.6	33.1	5.4	4.2	—
2010. 5.23	35.8	32.3	6.7	3.5	—
2010. 5.27	33.7	29.0	5.0	2.0	—
2010. 5.27	33.4	30.0	5.0	3.2	—
2010. 5.27	34.9	32.4	7.9	3.1	—

出所：『済州のソリ』の報道により筆者作成

2. 選挙構図の分析

選挙は構図とイシューによって決まる。全国的には、今回の地方選挙を「政権安定論か政権審判論か」あるいは「李明博政権か盧武鉉政権か」の対決として捉えているが、済州道では「世代交代か経験を積んだ指導者か」、「官僚か非官僚か」などの様々な対決構図が現れていると思われる。

筆者は、今回の選挙の対決構図を3つに分けて説明したい。これは、選挙において構図が最も重要であり、構図によって各候補者の選挙戦略が変わるからである。

(1) ハンナラ党 1 vs 民主党 2

今回選挙の公式的な構図は民主党 1 人対無所属 2 人である。しかし、無所属候補者は単なる無所属ではなく、

政党公認を狙った人物であり、各々ハンナラ党と民主党の公認を望んでいた。民主党 1 人対無所属 2 人の対決のように見えるが、実質的にはハンナラ党員の殆どが玄明官選挙運動員として選挙に参加したし、民主党員の場合、両分されて、それぞれの候補者選挙陣営に入った。したがって、民主党 1 人対無所属 2 人というより、ハンナラ党 1 人対民主党 2 人という構図に看做した方が現実的であろう。

この構図の下では、ハンナラ党の支持票結集は、玄明官にとって相対的に有利になり、民主党の高喜範と無所属の禹瑾敏の民主党支持票をめぐる競争は激しく進むと予想できる。実際に、各政党の公認が決まっていなかった時期である 1 月 14 日に発表された世論調査¹⁵⁾において、民主党公認候補者としての選好度調査によると、禹瑾敏は 44.6% を記録し、圧倒的な優位を占めた。12.2% を得た高喜範とは 32.4% も差が広がった。2 月 12 日の世論調査¹⁶⁾では、民主党公認候補者適合度調査において禹瑾敏が 33.7% で 1 位を、高喜範が 21%、金泰煥が 13% の順であったし、民主党支持層の支持率は禹瑾敏 47.6%、高喜範 22%、金泰煥 12.8% の順であった。興味深いことに、この調査では、ハンナラ党の公認候補者適合度においても禹瑾敏は 22.7% で 20.8% の姜相周を僅差ではあるがリードしている。ハンナラ党支持層の支持率においても、禹瑾敏は 23.8% を記録し、21.3% を獲得した姜相周をリードした。KBS 済州の世論調査¹⁷⁾においても、禹瑾敏はハンナラ党と民主党の支持層からバランス良く支持を受けている。もちろん、禹瑾敏はこの時期に党籍を有していないため、ハンナラ党にも、民主党にも、入党する可能性はあったが、政党を問わずバランスの良い支持を記録したのは支持基盤の堅固さに注目すべきである。

ハンナラ党の候補者確定の時点から無所属の禹瑾敏と民主党の高喜範の票割れはもっと明瞭となる。5 月 3 日の世論調査¹⁸⁾では、玄明官 37.8%、禹瑾敏 26.3%、高喜範 14.5% の支持率を記録し、民主党支持層の票結集が求められる状況であった。同日の他世論調査¹⁹⁾においても、玄明官 39.0%、禹瑾敏 31.6%、高喜範 15.9% の結果が現れた。玄明官と禹瑾敏と高喜範の支持層分析によると、玄明官はハンナラ党支持層から 62.9% の支持率を得ているが、禹瑾敏は民主党支持層から 41.3%、民主労働党支持層から 41.7% の支持を得ている。その反面、高喜範は民主党支持層から 33.0%、国民参与党支持層から 37.7%、

進歩新党支持層から47.8%の支持を得ており、ハンナラ党の結集力が優れていることと、民主党公認ではあるが、禹瑾敏よりは民主党支持層の忠誠度が低いこと、そして民主党支持層が高喜範と禹瑾敏に分かれ、むしろハンナラ党の玄明官に多少有利に働くのが分かる²⁰⁾。

このように、ハンナラ党より民主党の支持層結集力が弱いのは当然の結果であろう。民主党に支持基盤を置いている2人の候補者が立候補する以上、票割れは避けられない現象であろう。この構図の下で禹瑾敏と高喜範は民主党支持獲得のためにどのような戦略を採ったのであろうか。

(2) クリーンなイメージ1 vs 道徳的問題のある2

今回の選挙構図は、無所属候補者の道徳的問題に起因するという点に異見はないだろう。禹瑾敏に関する民主党指導部の「候補者不適格」判定後の離党と無所属出馬、そして、玄明官の弟の拘束に相次ぐ離党と無所属出馬がその原因に間違いはない。このような側面からみると、今回の選挙はクリーンなイメージである民主党の高喜範とセクハラ・選挙法違反前歴のある無所属の禹瑾敏、そして金ばら撒き選挙の無所属の玄明官という道徳と非道徳の戦いであるとも見える。

民主党に復党した禹瑾敏はセクハラ前歴論難が本格的に支持率にも影響を及ぼしはじめた。禹瑾敏は依然として先頭を維持しているのではあるが、3月16日の世論調査²¹⁾においては、禹瑾敏と姜相周の両者仮想対決の場合に、禹瑾敏は33.6%、姜相周は32.9%を記録し、支持率差は僅か0.7%まで縮まった。いわゆる「禹瑾敏大勢論」がかなり揺れている様子である。民主党候補者選出戦でも禹瑾敏は36.5%、高喜範が22.3%を記録し、相変わらず禹瑾敏が有利ではあるが、2月10日の世論調査での禹瑾敏(40.8%)と高喜範(14.1%)の支持率よりずいぶん差が縮まり、セクハラ前歴論難と高喜範の絶食抗議が世論の推移に影響を与えている。特に、ハンナラ党候補者が決まってから玄明官の弟の拘束の時期まで行われた世論調査では、7.5～14.5%の差で玄明官がリード続けた。

そして、玄明官の場合、ハンナラ党の公認を獲得してからは世論調査1位を持続したが、弟の拘束そして離党及び無所属出馬宣言以後に支持率が下落した。5月10日から選挙戦が終わるまでの世論調査平均支持率は26.0%で、34.4%を記録している禹瑾敏に8.4%落ちてお

り、姜相周との候補一本化以後にも平均32.3%で、34.3%の禹瑾敏に僅差ではあるが、負けていた。

しかし、このような問題が選挙争点になったにも関わらず、クリーンなイメージを強調しながら選挙戦に臨んできた高喜範の支持率にはそれほど影響がなかったことに注目したい。

道民世論調査からでも分かるように、候補者の道徳性は有権者にとって重要な選択基準の1つに間違いはない。このような意識から考えてみると、この構図の下では民主党の高喜範にとっては、相当有利な立場に置かれる可能性が高い。優越する道徳性を武器にして道徳的問題を抱えている2人の候補者に対してネガティブ攻略を進めるとかなり勝算があると考えたとしても当然であろう。

(3) 地方型1 vs 中央型2

本研究において、当選者の勝因に最も説得力のある構図はこれではないかと考える。

農村地域における「動員投票 (Mobilization voting)」の理論はこの構図の中で強い影響力を発揮する。動員投票とは、「政治的意識を持たず単に自分の家族、村、親戚、あるいは政府官僚の圧力に順応して行われる行為」を意味する。農村の人々が都市人に比して高い投票参加率を表すのは彼らの殆どが自発的に投票に参加するより外部の圧力によって動員された投票行動をとるためであり、官権・金権、周りの勧誘などの外部の圧力を経験した有権者は野党より与党に票を投じる可能性が高いということである²²⁾。

このような動員投票理論は組織選挙にも適用できる。特に、済州道のように有権者424,000人の狭い地域で準農村選挙区²³⁾であれば、組織選挙の影響は増加する。ここで、論じたいのは、済州道民の被害意識と排他性²⁴⁾、そして組織選挙が可能であることから2つの重要な政治的分析が可能になるということである。つまり、地域に対する奉仕度を測る傾向があることと組織力の重要さである。1995年から今回6回目になった歴代民選道知事選挙において、立候補者は全て済州道出身であった。しかし、面白いのは、総出馬者の17人のうち、ソウルで活動した4人の出馬記録はあるが、当選したことはない²⁵⁾。その原因は、地域を守って奉仕してきた出馬者より組織力の不足と地域に対する奉仕度の劣勢という要因が複合的に絡んでいるのではないかという著者の問題意識から説明しようとする。

実際に、今回の選挙が初出馬である高喜範の場合、済州では高校まで卒業をした後にソウルに上京し、韓国外国語大学を卒業し、中央言論であるハンギョレ新聞記者を始め、ハンギョレ新聞社長・済州4・3真相究明名誉回復推進委員会の共同代表を歴任した人物である。つまり、済州関連の業績はあるが、主にソウルで活動した人物であるという認識が強い。玄明官の場合にも、中学校まで卒業し、高校時代からソウルに住んできて、ソウル大学卒業後に行政高等試験に合格し、日本留学を経てサンソンに入社しサンソン物産会長を歴任した財閥出身の人物である。もちろん、2006年にも知事選に立候補したが、落選した後もソウルで生活しており、地域への関心が疎かであると思われる。その一方、禹瑾敏の場合は、高校卒業後に明智大学を卒業して、職業軍人、そして中央行政部で勤めたが、1991年から道知事として活動し、1995年・1998年・2002年の3回に至る道知事出馬と2回の民選知事経験などからみると、地域に対する奉仕度、そして知名度はもちろん、組織まで揃えていたといえる。

ここで、ソウルを中心に活動して立候補した候補者を中央型、済州を中心にして活動している候補者を地方型として分類すれば、今回の選挙は地方型1人と中央型2人の対決構図になる。

3. 選挙戦略

(1) 高喜範の選挙戦略 — クリーンな道知事、堂々とした済州

1) 世代交代論

6.2 地方選挙において、世代交代論は金泰煥の不出馬時点における勝者に対する挑戦者の変化追求の論理であり、選挙戦略である。世代交代論が改めて脚光を浴びるのは、愼久範（シンゲボム²⁶⁾・禹瑾敏・金泰煥に要約された民選15年を清算し、済州の未来発展を新たな世代が担うのが望ましいという道民の情緒に強く訴えるところがあるからであろう。この点から世代交代論は2つの側面を有する。

何よりも特定世代の政治家を退場させようとする清算論につながる。特定世代の政治家が既得権を圧倒的に行使すればするほど、新進勢力は変化要求を込めて清算論を提起するようになる。2010年の地方選挙において禹瑾敏と金泰煥の清算論が道民らにとって説得力を有する理由は、一次的には愼久範・禹瑾敏・金泰煥・それに玄

明官までを含めて、全員が法違反の疑いで裁判を受けたことがあり、道徳性という側面から彼らを拒否する道民の情緒が強く働くためである。このように世代交代とは道徳性を欠いた旧世代を清算し、この代わりに道徳性を備えた新進世代が登場すべきであるという主張である。

第二に押さえるべきは、世代交代論は、単なる愼久範・禹瑾敏・金泰煥の清算論ではなく、新たな価値観とビジョンが提示されてはじめて政治的影響力を確保できるということである。高喜範の場合、言論出身の非官僚的道政運営を率いることができる点から差別性のある人物だと思われる。高喜範にとって、世代交代の意味は単なる愼久範・禹瑾敏・金泰煥の清算だけではなく、官僚的硬直性から逃れ、市民社会の活力を最も大きく求めながら済州未来ビジョンを見つけることを意味する。結局、世代交代論は、変化の要求であり、方法論の設定である。同時に現実的に劣勢状態である新進勢力が既得権に抵抗し、これを乗り越えようとする選挙戦略の性格を帯びる²⁷⁾。

2) 反ハンナラ党の野党単一候補

6.2 地方選挙は李明博政権に対する審判の性格を帯びるだろうと見られた。実際に、今回の地方選挙においては政権安定論より政権審判論に共感する国民が多く、ハンナラ党の候補支持の35.7%より野党単一候補を選ぶと答えた国民が48.0%で多かった²⁸⁾ということから、反ハンナラ党・反MB連帯性格の野党単一候補戦略は、結局ハンナラ党に対して1対1選挙構図を確立させるための戦略であるのが分かる。済州の野党単一候補は反ハンナラ党の結集という全国的構図とは別に古い開発リーダーシップから新たなビジョンリーダーシップに進む意味をもつ²⁹⁾。全国的な野党単一候補戦略は民主党・国民参与党・民主労働党・進歩新党・創造韓国党の5つの野党連合の形であるが、済州では、候補者を擁立している民主党・民主労働党・国民参与党の合意で進んだ。

高喜範は民主党候補者になった後、民主労働党の玄愛子前国会議員と国民参与党の吳玉晩道党委員長との野党単一候補協議を通じて、5月10日に野党単一候補となった。当時の各候補者の支持率は5月3日の調査³⁰⁾では高喜範14.5%、玄愛子5.3%、吳玉晩2.9%を記録したが、単一候補としてのインパクトには疑問が残る。3野党間の反ハンナラ党の単一候補ができたとしても、その単一候補を後押しする組織力がどのくらいであるのか疑わし

い³¹⁾からである。高喜範の場合、単一候補になったとしても、ハンナラ党の玄明官 39.7%、無所属の禹瑾敏 26.8%、民主党の高喜範 18.6%で選挙戦には直接的な影響がなかったことが分かる。ここで、候補間のあらゆる戦略的提携は1 - 2位間に行われる場合はない点を考える必要がある。3野党の単一候補論も結局弱者間の提携である。高喜範が勝利しようとするならば、禹瑾敏までを含む戦略的提携が必要であったと思われる。しかし、禹瑾敏の道徳的問題を指摘してきた高喜範はその気はなさそうであった。結局、候補単一化戦略は選挙に大きな影響を及ぼしたというより3者対決を形成したという意味にとどまると評価できる。

(2) 玄明官の選挙戦略 — ハンラ山の経済奇跡・経済道知事

1) 大企業 CEO 出身の経済道知事論

済州道民は済州が韓国の周辺部社会であり、韓国人口の1%である済州出身の人物が中央権力への進出が難しいと考える傾向があり、中央依存性を有しているという³²⁾。この点から済州道民は中央政府に対する期待感が高いということが分かる。

玄明官はサンソン物産 CEO の経験に基づいた経済発展道知事論と済州道民の中央依存性に訴えることのできる与党の候補というイメージアピールに力を注いだ。行政専門家世代から経済専門家への世代交代という戦略や中央政府との対交渉能力のある人的ネットワークを揃えた経歴・能力を兼備している人物論を唱えた。経済道知事というタイトルは道民の経済発展への希望に応じた戦略である。財界で活躍した経験を生かして企業の投資を誘致して経済発展を図りうる人脈、そして、中央依存性の強い済州道民の心理にアピールし、中央政府からの支援を導き出せる与党所属の公認候補という点を強調している。

2) ハンナラ党出身間の候補単一化

玄明官の弟の拘束によって公認が取り消され、無所属出馬宣言そして、ハンナラ党の済州道知事選挙の無公認方針に反発してきた姜相周の無所属出馬宣言による4者構図は玄明官に新たな選挙戦略を求めるようになる。

まず、ハンナラ党の無公認戦略は建前では公党としての責任であると唱えるが、むしろ候補選出戦の次点者である姜相周より競争力の優れた玄明官の無所属出馬可能

性を開いたように思われる。もし、玄明官が無所属として出馬する可能性があるのに、次点者である姜相周を公認すると支持票の分散は当然であろう。無所属ではあるが、実質的なハンナラ党の候補としての選挙戦略ができるように無公認方針を採ったと判断した方が説得力がある。しかし、姜相周の無所属出馬宣言と玄明官の無所属出馬宣言によって道知事選は4者対決構図となった。4者対決構図の確立後に実施された世論調査³³⁾では玄明官が禹瑾敏に1位を譲り、すなわち順位が逆転してしまい、特に、ハンナラ党の支持層の34.8%が玄明官を、26.5%が禹瑾敏を、17.2%が姜相周を支持していると現れ、票割れがはっきりしていることが分かる。

この状況において、姜相周と玄明官はハンナラ党出身の候補単一化の必要性に共感し、5月24日に単一候補として玄明官が選出され、その後にハンナラ党との政策連帯を結ぶことによって、実質的にハンナラ党の候補として、3者構図の対決に進むようになった。

(3) 禹瑾敏の選挙戦略 — 世界に向かう済州・世界が求める済州

1) 経験のある安定的指導者論

禹瑾敏の武器といえるのは4回の知事経験と過去3回の選挙戦より形成された組織力であろう。特に、禹瑾敏の組織力は無所属でありながらも確固たる支持率を記録する原因として捉えられている³⁴⁾。民主党支持層だけではなく、ハンナラ党支持層の保守派の支持、そして全年齢・地域からバランスよく支持を受けているのも、この組織力に基づく。多重的ネットワーク社会である済州において、有権者は候補者か候補者の家族、選挙運動員、党员らから自分もしくは支持する候補者への投票を頼まれる場合が多いので投票に参加せざるを得ない環境に置かれている³⁵⁾。このように、投票行動が自発的でない場合に適用されるのがいわゆる動員投票理論である。動員投票理論は有権者らの自発的、意識的投票行動より外部的圧力によって行われる動員投票行動に焦点を合わせている。人口が少なく、排他的な政治性向を有している済州道民によって行われる選挙は組織力がかなりのパワーを発揮できる。

2) ネガティブキャンペーン

一般的にネガティブキャンペーンは挑戦者が現職議員に挑む場合により必要である³⁶⁾。もしくは、支持率の

落ちる候補者が1位候補者を相手にして繰り広げる場合が多く、より効果的である。

禹瑾敏の場合は、金泰煥との仮想対決の時期にはあらゆる候補者らのネガティブキャンペーン対象であった。しかし、金泰煥の不出馬宣言後の民主党への復党、そして離党過程を経て無所属になってからは、彼自身が主に玄明官に対するネガティブキャンペーンを展開した。選挙においてネガティブキャンペーンの効果が現れ始めたのは玄明官の弟の拘束の後に玄明官が無所属として出馬した時点からである。

玄明官の弟が警察に逮捕された時点から禹瑾敏の選挙陣営は警察の徹底した捜査を促した。玄明官の道徳性に関する問題をイシュー化しようとした戦略であった。玄明官の側は監視動画を撮影した金○○（49歳）を不法査察・不法撮影・私生活侵害・名誉毀損などの疑いで告訴し、金氏が禹瑾敏の支持者であることを強調しながら、禹瑾敏陣営の政治工作戦略を批判したが、逆転された世論は回復されなかった。玄明官がハンナラ党を離党して無所属として選挙戦に臨んだ後にも、禹瑾敏によるネガティブキャンペーンは続いた。金品選挙だけでなく、済州道に対する奉仕度を問題視した。排他性の強い済州道民の心理を利用した戦略である。玄明官は実際に2006年の道知事選挙で落選した後にソウルに引き続き、済州に無関心であったという批判であった。

このように、禹瑾敏はクリーンな政治を望む有権者の意識と排他性を刺激し、ネガティブキャンペーンを繰り広げた。禹瑾敏の戦略が有権者、特に玄明官支持層の脳裏に強く刻まれた原因は、何よりも有権者のクリーンな政治を求める政治意識であったと言える。

3) 民主党支持層への攻略

実質的に与党1人と野党2人の対決構図で進んだ今回の知事選には、民主党支持層のジレンマが存在する。一般的な有権者は自分の支持候補者が当選するのを望み、自分の票が死票になるのを嫌がる。こうした観点からみれば、民主党支持層は、あまり当選可能性のない高喜範に投票することをためらうようになる。実際に民主党の支持者の中で高喜範より禹瑾敏に対する支持が高いのは当選可能性の問題にも関連がある。もちろん、禹瑾敏が民主党候補として出馬したら、当選する可能性はもっと高いと判断される。この状況の下で禹瑾敏の個人組織だけで当選を狙うのは無理のように見える。民主党支持層

の戦略的投票を期待するのも安易である。むしろ、禹瑾敏はなぜ無所属であるのかを説明し、本人の政策目標と価値を通じて他政党あるいは他候補との連帯を図る戦略が求められる。この戦略が民主党支持層に対する攻略である。

選挙戦の最終段階にきた5月31日に、禹瑾敏は街演説で「私の精神的根は民主党である」と民主党に対する忠誠心を現しながら当選後の民主党復党意志を明かした。また、高喜範との「当選後の道政協力方針」を示し、積極的に民主党支持層の戦略的投票を導こうとした。結局、有権者の死票防止心理に訴えた戦略であったと評価できる。

4. 公約比較

ダウンズは、政党は政策をつくるために選挙において勝つわけではなく、選挙に勝つために政策を形成し、政治家の一次的目標は当選することであるとしている³⁷⁾。つまり、選挙において勝利するためには、有権者の利益を最大化できる政策を確立しなければならない。

しかし、今回の選挙の最大要因としては政策よりもやはり、玄明官の弟の金品選挙事件であろう。調査結果³⁸⁾によると、今回選挙の最大要因として玄明官の弟の金品選挙事件が35.7%、ハンナラ党の公認剥奪が19%、ハンナラ党出身者の無所属出馬が11%という回答であった。現職知事の不出馬・野党単一候補は5%程度に止まった。政策選挙・公約対決ができなかったことについては、中央党指導部が29%、道知事候補者が21%、候補支持者が9.9%、済州道党が8.3%という回答であった。特に、時々刻々変化する選挙構図のせいで、有権者は候補者の人柄や政策・公約をじっくり比べる機会さえなかった。最大懸案として経済活性化・雇用創出・地域均衡発展・ミカン産業発展などがあつたが³⁹⁾、選挙戦が本格化してから散発的に発表された政策以外に候補者間に対比できるイシューは行政構造改編の問題と海軍基地問題くらいであった。その他に新空港建設の問題、ハンラ山ケーブルカー設置問題などが取り上げられるが⁴⁰⁾これさえ、熾烈な政策対決にはつながらなかった。特に、「一般的に済州道民は候補者の公約が重要であるという原則には同感しながらも候補者選択の決定的な基準としては判断しない」⁴¹⁾という意見に筆者も同感する。だからこそ、候補者は政策よりネガティブキャンペーンもしくは組織選挙に依存していると考えられる。

一部では政策選挙のために、マニフェストと名づけて財源と期限などを数値で表す公約を提示するように求めているが、実際に一目瞭然に表すのは難しい。しかし、様々な市民団体のマニフェストキャンペーンは革新的民主主義理論と実践として熟議民主主義の一軸を担っている。ここでは、各候補者の政策・公約を地域懸案・経済活性化というカテゴリーに分けて簡単に紹介することにしたい。

(1) 地域懸案

表 3 地域懸案についての公約比較

	高喜範	玄明官	禹瑾敏
基礎自治権復活	賛成 (1 広域道・1 広域議会・4 市に改編し、市長直接選出)	反対 (行政組織の戦略的改編は必要)	賛成 (市長直接選出)
海軍基地問題	住民投票による決定	受容前提に道民利益最大化	選挙後に延期・代案模索
営利病院	反対	賛成	反対
ケーブルカー設置	反対	肯定的検討	否定的
内国人カジノ	反対	慎重な検討	道民共感が優先

出所：『済州のソリ』報道により筆者作成

自治権復活⁴²⁾ 論争は既存の 1 道 2 市の構造をめぐる政策対立である。

高喜範は、済州道を東西南北文化圏として 1 広域道・1 広域議会・直接市長を選出する 4 市体制を唱えた。

玄明官は原則的に基礎団体復活に反対の立場である。今の段階では行政構造改編より経済活性化が優先であるという立場である。ただし、必要に応じて行政組織を戦略的に改編しようと唱えた。

禹瑾敏は行政構造は維持しながら 2 市の市長を直接選出する案を提案した。高喜範の主張と類似している。

海軍基地問題については、高喜範は政府が基地の必要性を十分に説明し、住民の民主的合意過程を経て決めるべきであると唱えている。

玄明官は受容を前提にし、新たな支援対策を政府に要求することを掲げた。

禹瑾敏は海軍基地着工を選挙後に控え、当選したら代案を備えるという多少消極的な立場をとっている。

営利病院については、高喜範・禹瑾敏は反対、玄明官は賛成である。

ハンラ山ケーブルカー設置の問題については、高喜範・禹瑾敏は反対の立場をとり、玄明官は「自然と調和できるケーブルカーであれば肯定的に検討可能である」という立場である。

内国人カジノについては高喜範は反対で、玄明官・禹瑾敏は慎重論であった。

(2) 経済活性化

表 4 経済活性化についての公約比較

	高喜範	玄明官	禹瑾敏
経済活性化公約	① 2000 億ウォンのファンド募金 ② 商圏活性化プロジェクト ③ 三多水 ⁴³⁾ のグローバル化 ④ 1 万人雇用創出 ⑤ 郷土資源の育成	① 玄明官ファンド 3 兆ウォン ② 1 次産業のニューディール政策 ③ 世界的水産業育成 ④ 清浄産業育成 ⑤ 2 万人雇用創出	① 輸出 1 兆ウォン ② 海外観光客 200 万人誘致 ③ 2 万人雇用創出 ④ 郷土資源を活用した成長産業育成 ⑤ 地域経済活性化

出所：『済州のソリ』報道により筆者作成

高喜範は済州らしい庶民密着型の経済対策を掲げた。済州だけの資源を利用した政策を通じて、利益が道民に還元されるような点を強調している。

玄明官は全国経済人連合会の副会長を務めた経験を生かして、玄明官ファンドを設立し、3 兆ウォンの募金を目指している。水産業・済州だけの清浄商品を輸出する戦略掲げた。

禹瑾敏は、自治権復活を通じて地域住民が率いる自立型済州経済基盤の構築を約束した。輸出と海外観光客の誘致による経済活性化戦略を掲げている。

5. 選挙結果

済州道は 2006 年に済州特別自治道になってから、一般の地方選挙とは違って、1 広域道・2 市体制で道知事と道議員は住民が直接選出し、市長は道知事が任命し、市議会議員は選出しないという特徴がある。道議員は地域区と比例代表制度によって選出され、教育長も今回の選挙を通じて選出する。つまり、済州道民は道知事・道議員・道議員比例代表・教育長・教育議員を選出した。ここでは、今回の選挙の結果を道知事選挙と道議員・道

議員比例代表選挙に分けて紹介する。

(1) 道知事選挙の結果

表5 道知事選挙の結果⁴⁴⁾

地名	高喜範	玄明官	禹瑾敏
済州道	48,186	108,344	110,603
済州市	36,447	74,905	78,514
西歸浦市	11,739	33,439	32,089

第5回の全国地方選挙は全国投票率54.5%を記録した。済州道知事選挙は65.1%の投票率を記録し、全国1位となった。結果は、無所属の禹瑾敏の当選で終わった。禹瑾敏は全体有効投票数276,056票中、110,603票を獲得し、41.4%の得票率を記録した。洞地域より町村地域で高い投票率を記録し、組織力を誇った⁴⁵⁾。

(2) 道議員選挙の結果

道議員選挙は、全29地域区の中で、民主党が16議席を獲得し、ハンナラ党が9議席、民主労働党が1議席、無所属が3議席を収め、民主党の勝利で終わった。2006年の選挙でハンナラ党が18議席を、ヨリンウリ党⁴⁶⁾が7議席、民主労働党が1議席、無所属が2議席を獲得したのに比べて民主党の躍進が目立つ。

(3) 道議員比例代表選挙の結果

表6 比例代表選挙の結果⁴⁷⁾

	ハンナラ党	民主党	民主労働党	国民参与党
済州道	96,878	95,980	29,909	26,558

道議員比例代表選挙は候補者ではなく、政党に投票する方式である。政党は比例代表候補者の順位を決め、得票率によって議席の配分を受ける。今回の道議員比例代表選挙は、全7議席の中で、ハンナラ党が36.1%を記録して3議席を確保し、民主党が35.7%を、民主労働党が11.1%、国民参与党が9.9%を記録して、各々2・1・1議席を獲得した。民主党は高喜範が18%の得票を取めたが、政党比例代表選挙ではハンナラ党に匹敵するほどの得票率を記録した。

Ⅲ. 民主党・国民参与党・民主労働党の候補一本化

1. 3野党候補一本化過程

2010年4月16日、済州地域の5野党は、各党の道党委員長と知事予備候補らが参加した会合において、党レベルの野党連帯の論議を本格化できることを示唆した。今回の選挙において、知事予備候補を擁立した民主党、民主労働党、国民参与党は進歩新党、創造韓国党、市民社会団体などと共に、政策連帯を通じた「進歩大連合」という大構図の下で、地方選挙がハンナラ党政権に対する審判の場にならなければいけないという認識を共有した。特に、進歩陣営が分裂している状況の下では、ハンナラ党の相手になりえないという判断により、1対1の対決構図の形成に必死にならざるを得ないのである。

25日には、道知事候補一本化の選出方式として電話世論調査を実施することで合意した。これにより、共同政策として、済州海軍基地の再検討、営利病院の許容反対、4.3特別法の改悪阻止などの主要地域懸案に対し、「政策共助」に合意した。

やがて、29日に、済州道知事選挙の候補一本化が妥結され、民主労働党・国民参与党が提案した世論調査60%・道民参加世論調査40%の電話世論調査方式で選出することにした。5月8～9日に一般世論調査(1000人、60%)と道民参加世論調査(40%)を実施し、公式候補登録期間である13～14日までに候補一本化を終え、20日までに共同選挙対策本部を構成することに合意した。これとともに、3人の候補らは済州海軍基地建設の全面再検討、4.3特別法の改悪撤回及び真相究明と犠牲者の名誉回復、国内営利病院及び内国人カジノ、ケーブルカー設置反対、韓米・韓中FTA推進中断に対する共同の立場を表明した。

しかし、5月3日に発表された世論調査⁴⁸⁾では、ハンナラ党の玄明官37.8%、無所属の禹瑾敏26.3%、民主党の高喜範14.5%、民主労働党の玄愛子5.3%、国民参与党の呉玉晩2.9%の支持率で、民主党の高喜範が単一候補として臨むとしても、ハンナラ党の玄明官39.7%、無所属の禹瑾敏26.8%、民主党の高喜範18.6%となり、順位には影響がないという結果が出ていた。同日の世論調査⁴⁹⁾においても、一本化候補としては、民主党の高喜範(41.8%)が、民主労働党の玄愛子(14.8%)、国民参与党の呉玉晩(7.8%)をかなり上回る支持率を記録

したが、全体の支持率順位には影響がないという結果が見られる。当選可能性においても、ハンナラ党の玄明官 37.1%、無所属の禹瑾敏 32.6%に対し、民主党の高喜範 4.4%、民主労働党の玄愛子 0.7%、国民参与党の呉玉晩 0.2%という非常に低い数値を記録した。民主党支持層でさえ、党所属の高喜範 (10.7%) より無所属の禹瑾敏 (41.0%)、ハンナラ党の玄明官 (27.5%) の当選可能性を高く評価しており、民主労働党の支持層も、禹瑾敏 41.0%、玄明官 23.8%、国民参与党の支持層も、禹瑾敏 52.0%、玄明官 22.6%で同様であった。さらに、支持政党別にはハンナラ党支持層の 62.9%が玄明官を支持する一方、民主党支持層は無所属の禹瑾敏 (35.5%) を高喜範 (27.6%) より支持しており、政党支持結集力がハンナラ党に比して低いことが分かる。

3野党の候補一本化過程を経て、結局、5月10日、民主党の高喜範が単一候補として選ばれた。民主党の高喜範は「全国最初に済州地域で野党連帯単一候補という韓国政治史上初の記録は済州政治が一段階跳躍したことを知らせる偉大な民主主義の勝利として歴史に記録されるはずだ」と語りながら、無所属の禹瑾敏とハンナラ党の玄明官に対し、セクハラ・選挙法違反問題、金品選挙疑惑問題を徹底的に追究し、道徳的優越性の原則を守る勝利を強調した。

2. 3野党候補一本化の評価

選挙において、構図と組織、そして政策は言うまでもなく重要である。しかし、ここで2010年済州道知事選挙に関連して、まず構図が注目される理由は、その対決構図が2者か、3者かによってその結果が異なるケースを過去に何度も経験したからであろう。二者択一は選好がより鮮明になるが、3者択一には選択の多様性から戦略投票さえ考慮するようになり、その過程はダイナミックである。この章では野党側の立場から対決構図に関する見解を述べようと思う。筆者が野党側の立場から見ようとする理由は次のようである。

まず、民主と福祉という政策価値と目標がハンナラ党より民主党もしくは民主労働党、進歩新党、国民参与党のような野党側から、より強調されているとみるからである。

そして、ハンナラ党に対する牽制が今回の地方選挙の大きな課題とみるからである。今回の選挙において、ハンナラ党に対する牽制があまり成されないと行政府と立法府を掌握しているハンナラ党を掣肘するものがなくな

る可能性を危惧するからである。

2010年4月30日、民主党・民主労働党・国民参与党が「野党連帯」合意を発表した。これにより、済州道知事選挙は、無所属出馬を宣言した禹瑾敏、ハンナラ党の玄明官、そして世論調査を通じて確定される野3党の単一候補の3者構図が予想された。2010年4月末の3者構図の下では、ハンナラ党が優位を占めているように思われた。この雰囲気の中で実施された世論調査において、ハンナラ党の玄明官 38.1%、無所属の禹瑾敏 26.0%、民主党の高喜範 11.6%の順に表れたのは当然の世論の流れである。

4月27日に玄明官がハンナラ党の候補として確定し、4月30日に、3野党の候補一本化合意を経て、済州道知事選挙は第4期へ進んでいる。現職知事の不出馬以前までは金泰煥に対する禹瑾敏優勢の第1期構図というなら、金泰煥の不出馬以後には禹瑾敏大勢論の第2期を経て、禹瑾敏の民主党入党及び離党過程を経て、いわゆるハンナラ党一民主党一無所属の3者構図が定立され、無所属の禹瑾敏とハンナラ党の玄明官の両者対決に民主党が追いつく第3期の選挙戦がここまでの状況であった。

第4期の選挙戦において、主な焦点は3つであろう。まず、3野党の候補一本化が如何なるインパクトを見せるかであり、2番目はハンナラ党は優勢を投票日まで守り抜けるのか、3番目は、無所属の禹瑾敏の組織力がこの状況を如何に乗り越えるのかということである。

組織という側面から注目されるのは、禹瑾敏である。ここで、禹瑾敏の組織力というのは、玄明官と3野党単一候補と比べると、彼はすでに3回の選挙経験と4回の知事在職を通じて組織を築いてきたという点から圧倒的である。無所属でありながら世論調査において優位を占めているのは禹瑾敏の認知度と組織力の強さによるものである。

この点からすれば、もし禹瑾敏が民主党公認を受けたなら、当選する可能性は高い。なぜなら、ハンナラ党や民主党のような有力政党の公認を受けるという事は、少なくとも10%程度の政党支持票が期待できるからである。

ここで、候補間の如何なる戦略的提携も1-2位間で成されるケースはないことを考える必要がある。3野党の候補一本化合意も本質においては弱者間の戦略的提携に違いない。そうであると、禹瑾敏としては、反ハンナラ党勢力を中心とする3野党単一候補との戦略的提携が必

要であろう。過去、金泳三の3党合同、金大中のDJP連合にも見られるように、必要であればいつでも苦手な相手であっても手を組む覚悟が必要である。今回の済州道知事選挙における、野党側の勝利は、ハンナラ党対反ハンナラ党連帯候補間の二者対決構図を作り出した禹瑾敏と3野党単一候補間の政治力の賜物である。

4月末の3野党候補一本化の目標は、二点あった。一本化によるインパクトの極大化とハンナラ党との1対1構図の形成である。候補一本化という試みは、民主一改革一進歩勢力の力量を結集させる機会であり、今後全国的な候補一本化モデルとして高く評価され得る。

ハンナラ党一単一候補一無所属間の対決に進む限り、選挙はハンナラ党に有利に展開することは否定できない。禹瑾敏と単一候補が反ハンナラ党勢力として結集する必要がここにある。済州では、ハンナラ党と民主党が対等な支持率を記録してきたため、必ずしもハンナラ党に有利とはいえないが、反ハンナラ党の支持票が民主党と無所属に分散されるため、ハンナラ党に有利に働くのである。ここで、問題になるのは、3野党単一候補の組織力である。3野党が一本化した候補は玄明官と禹瑾敏に批判的であった。このような候補一本化の純粋な意図はそれなりに評価されるべきだが、しかし、3野党単一候補が果たして玄明官・禹瑾敏と同時に戦えるほどの組織力があるかは疑問である。政策と組織をもって取り組むのが選挙というものだが、3野党の単一候補には政策はあるように見えるが、組織は有効投票の30%を越えることはなかった。

3野党の候補一本化過程を見ると、反ハンナラ党勢力の結集、ハンナラ党候補との1対1構図の形成という本来の目的とはかなり離れており、道徳的なイメージだけを重視した結果、無所属の禹瑾敏との選挙協力戦略をほとんど考えていなかった。さらに、禹瑾敏は民主党への復党を通じて、反ハンナラ党勢力として認めうるにも関わらず、3野党候補一本化過程においては、徹底的に排除されていることから、野3党候補一本化は勝利のためというより、弱体候補らの協力に止まってしまったという印象が強い。

IV. 結果と分析

今回の済州道知事選挙は、無所属の禹瑾敏が当選を果

たした。4回の知事経験からなる認知度・奉仕度、3回の選挙経験からなる組織力が勝因として上げられる。

ここで強調したいのは、3野党候補一本化戦略の敗因についてである。候補一本化戦略の有効性が一方にありながら、敗北した理由を検討したい。

1. 各候補者の脆弱な支持率

韓国の選挙において、候補一本化戦略は1位を狙って2-3位間で行われるのが普通である。単純な選挙工学的考え方としては、2-3位、各々の支持率が足され、1位の支持率を超えられそうな場合に有効として認識されてきた。

しかし、今回の済州道知事選挙においては、5者構図のなかで、3-4-5位間の候補一本化であることに敗因がある。民主労働党の政党支持率は1.3%~8.1%、国民参与党の場合、1.0%~4.2%で、非常に低い数値である。済州地域では、2強体制であるハンナラ党に対する民主党の政党支持率は、19.2%~35.7%でハンナラ党と対等といえるほどではあるが、民主党支持層の分裂により、その強みを失っていた。

候補者支持率においても、同様である。3月30日の世論調査⁵⁰)では、民主党の高喜範5.8%、民主労働党の玄愛子4.1%、国民参与党の呉玉晩0.4%であり、4月17日の世論調査では、民主党の高喜範5.8%、民主労働党の玄愛子3.7%、国民参与党の呉玉晩1.0%であった。5月3日の世論調査においても、民主党の高喜範14.5%、民主労働党の玄愛子5.3%、国民参与党の呉玉晩2.9%の順で、一度も十分戦える支持率を記録した事はないといえるであろう。

一本化以降の支持率も選挙には影響が無かったといえる。候補一本化のインパクトというものが見えない。民主党の高喜範は、民主党公認獲得から一本化寸前まで、10.7~15.3%の支持率で3位を記録してきたが、一本化以降には11.7~18.5%を記録、相変わらず3位に止まってしまった。ハンナラ党との1対1構図形成の失敗がその原因であろう。

2. 分割投票

今回の済州道知事選挙の最も大きな特徴というのは、いわゆる「政党支持」効果がないということである。有力候補が政党公認を得られず、無所属として出馬することで政党支持の効果が薄められた。野党側は候補一本化

したが、支持層が分裂してしまい、死票防止のため、いわゆる「分割投票」の現象まで見られた。

(1) 済州道の政党支持分析

韓国のように政党に対する地域主義的支持基盤の強い場合は、誰が地域内の有力政党から公認を獲得するのが事実上の当選を左右する決定的な要素になってきた。実際に多くの有権者は候補者についての評価よりも、自分が支持する政党の候補者に票を投じるケースが多い。さらに、候補者の政策と経歴が絶対的優勢を占めにくい選挙であればあるほど政党投票が圧倒的な当落要因として働くようになる。済州道の場合は、他の地域に比して政党の地域的支配構造や情緒が、一方に偏っていない地域なので、客観的均衡感が存在する地域として評価されている。この点に関して済州道有権者は、ハンナラ党と民主党とのつながりが相対的に弱い。このことから、済州道の投票が韓国政治一般に言われる地域政党化傾向に従わない面があるということであり、このことがまた、選挙に臨む候補者らの入党と離党についてあまり重要視しないということにもつながる⁵¹⁾。禹瑾敏の場合、民主党の公認を狙ったが、失敗し公認権を行使する民主党中央との対立軸を維持しながら済州道民の相対的剥奪感に訴えて、選挙戦に臨んだと言える。中央政治圏と済州道民の対決として選挙構図を二分化させた有用な選挙戦略であった。

(2) 最終投票結果の政党支持分析

最終得票結果は、先に記したように、高喜範が 48,186 票 (18.0%)、玄明官が 108,344 票 (40.5%)、禹瑾敏が 110,603 票 (41.4%) を獲得し、比例代表道議員選挙では、ハンナラ党が 96,878 票 (36.1%)、民主党が 95,980 票 (35.7%)、民主労働党が 29,909 票 (11.1%)、国民参与党が 26,558 票 (9.9%) を獲得した。

興味深いのは、民主党の政党投票結果と候補者投票結果に相当なズレがあることである。比例代表選挙において、民主党は 95,980 票を獲得したが、高喜範の得票は 48,186 票にとどまった。特に、民主党・民主労働党・国民参与党の連立単一候補者として選挙戦に臨んだ高喜範としては、政党支持の忠誠度が 100% であると仮定すれば、152,447 票を得票しなければならない。しかし、結果は、民主党支持の 50%、民主党・民主労働党・国民参与党の支持の 31.6% を獲得するにとどまった。政党支

持とその強度だけによって投票率と得票率が定まる、いわゆるノーマル・ヴォートの概念に反する 3 野党の支持離脱がかなり目立つ結果である。

(3) 民主党支持層の分割投票

「有権者が選好する政党の勝つ可能性が殆どない場合、有権者は最も選好しない政党の勝つことを防ぐために勝つ可能性の高い他の政党に投票する」という投票行動理論は今回の選挙の民主党支持層の分裂現象を説明するのに有効である。

選挙が実質的にハンナラ党・野党単一候補⁵²⁾・民主党系無所属間の対決に展開される限り、玄明官にとって有利であるのは否定できない。これは、済州ではハンナラ党と民主党が対等な支持率を見せてはいるが、反ハンナラ党の票が民主党と無所属に分散されれば、実質的にハンナラ党支持層の支持を受けている玄明官の勝利可能性が高くなるのは当然である。このように不利な状況に置かれたにも関わらず、無所属の禹瑾敏が当選できた理由は、民主党・民主労働党・国民参与党の支持層の戦略的支持⁵³⁾・死票防止心理が高喜範より当選可能性の高かった禹瑾敏に向かったからである。

選挙戦が本格的に 3 者構図になってからの当選可能性に対する調査は行われていない。しかし、選挙戦の期間に通して高喜範の支持率と当選可能性は 1 位と相当差のある 3 位であった⁵⁴⁾。30% 前後の政党支持率を有している民主党の候補として、10% 以下の得票可能性という調査結果は、民主党支持層の持っている高喜範の脆弱な支持基盤・競争力に対する不信感・不安感を反映している。それに、禹瑾敏と玄明官の二者対決が進むなかで、禹瑾敏が繰り広げた民主党支持層への訴えかけも反ハンナラ党支持票を結集させた効果があった。結局、最終投票においては、民主党支持が 35.7% を記録したのに対して高喜範は 18.0% の得票に過ぎなかったことから、民主党支持層の支持離脱が相当な水準であったことが分かる。特に、民主党・民主労働党・国民参与党の単一候補という点まで勘案すれば、56.7% の政党支持率を期待できたに対して、高喜範は 3 野党支持票を 31.6% しか得票できなかったことが分かる。

注

1) 韓国社会世論調査研究所が 2010 年 1 月 25 日に全国成人男女の 700 人を対象に調査した結果、野党候補支持率が

- 45.7%、ハンナラ党支持率は38.3%であった。人物競争力の差がない場合にも48.0%対35.7%で野党単一候補に対する支持が高かった。
- 2) ジョンヨンジュ、「2006 地方選挙の政治的意味」、2006 年 4 月 6～7 日 ヨンセ大学国家管理研究院の 2006 年学術会議発表論文
 - 3) ヤングルヒョン、「5.31 済州特別自治道知事選挙と候補公認過程」、『平和研究』第 17 巻第 1 号（2006 年 8 月）157～199 項
 - 4) 1942 年生まれ。南済州郡守・済州道行政副知事を経て 98 年・2002 年に済州市長、2004 年（34 代）・2006 年（35 代）に済州道知事に当選した。
 - 5) 「6.2 地方選挙の観戦ポイント、広域団体長」、『中央 SUNDAY』、2010 年 1 月 5 日
 - 6) 1942 年生まれ。27・28（1991～1993 年）・32・33（1998～2004 年）代済州道知事を歴任した。2004 年に選挙法違反疑いで罰金 300 万ウォンを言い渡され、当選無効となった。2008 年に赦免復権され、被選挙権を回復し、今回の選挙に立候補した。
 - 7) 「禹元知事、民主党へ復党」、『済州のソリ』、2010 年 3 月 3 日
 - 8) 禹元知事は 2002 年 2 月に自分の執務室で女性団体の幹部の胸を触ったセクハラ疑いで女性府に申告され、その年の 7 月に女性府からセクハラ判定を受けたにも関わらず、これを不服として女性府を相手に行政訴訟を提起した。しかし、大法院は 2006 年 12 月にこれを棄却し、「セクハラ」として確定された。
 - 9) 「禹元知事、民主党から候補者不適格判断される」、『済州のソリ』、2010 年 3 月 17 日
 - 10) ハンギョレ新聞社の世論調査、2010 年 3 月 16 日
 - 11) 1953 年生まれ。ハンギョレ新聞社長、韓国エネルギー財団事務総長を歴任した。今回の選挙が初挑戦である。
 - 12) ここでの世代交代論は単なる年齢の問題だけではなく、官僚出身・旧時代政治家から非官僚出身・旧時代の終結という意味の世代交代論である。
 - 13) 1941 年生まれ。前サンソン物産の会長出身。元ハンナラ党の済州道党委員長を歴任した。2006 年の知事選に立候補したが、金泰煥知事に敗北し、今回が 2 回目の挑戦である。
 - 14) ハンラ日報世論調査、2010 年 4 月 21 日
 - 15) ハンギョレ新聞世論調査、2010 年 1 月 14 日
 - 16) 済州 MBC 世論調査、2010 年 2 月 12 日
 - 17) KBS 済州世論調査、2010 年 2 月 13 日
 - 18) ハンギョレ新聞・ザーピプル共同世論調査、2010 年 5 月 3 日
 - 19) 済州のソリ・ハンラ日報・KCTV 済州放送・済州 CBS の共同世論調査、2010 年 5 月 3 日
 - 20) 「玄明官、野圏候補者の誰にでも優勢。禹瑾敏、猛追撃」『済州のソリ』、2010 年 5 月 3 日
 - 21) ハンギョレ新聞世論調査、2010 年 3 月 16 日
 - 22) ユンチョンジュ、『投票参加と政治発展：我国の政治実態』（ソウル大学出版部、1985 年）、75～101 項
 - 23) 準農村選挙区とは、15 歳以上の労働人口の 20～40%が第 1 次産業に従事している選挙区である。これは、ジェラルド・カーティス、『代議士の誕生』（日経 BP 社、2009 年）、27 項から引用
 - 24) ここでの排他性とは、政治的文脈で言及している。中央から公認した人物に対する拒否感、中央で大物として活躍している場合に対して排斥もしくは拒否する感情をいう。シンヘンチョル、「21 世紀の到来と済州道民の意識」、『済州社会論 II』、（ハンウルアカデミ、1998 年）、90 項
 - 25) 中央選挙管理委員会のホームページを参考し、作成した。
 - 26) 1942 年生まれ。29（1993 年）・31（1995 年）代済州道知事を歴任した人物。禹瑾敏と 95 年・98 年・2002 年の済州道知事選挙で対決した。
 - 27) 「6.2 地方選挙の観戦ポイント」『済州のソリ』、2010 年 3 月 1 日
 - 28) 韓国社会世論調査研究所が 2010 年 1 月 25 日に全国成人男女の 700 人を対象に調査した結果、野党候補支持率が 45.7%、ハンナラ党支持率は 38.3%であった。人物競争力の差がない場合にも 48.0%対 35.7%で野党単一候補に対する支持が高かった。
 - 29) 済州地域の市民団体が構成された「済州希望政治」は 2010 年 4 月 26 日に記者会見を通じて済州型野党連帯の意味を説明した。
 - 30) ハンギョレ新聞世論調査、2010 年 5 月 3 日
 - 31) 「野党単一候補、死のうとすれば生きる」『済州のソリ』、2010 年 5 月 3 日
 - 32) ヤンチャンユン、『選挙文化と済州道』（韓国学術情報、2007 年）、148 項
 - 33) ニュウシス世論調査、2010 年 5 月 16 日
 - 34) ヤングルヒョン、済州のソリのコラム、2010 年 5 月 3 日
 - 35) ヤンチャンユン、『選挙文化と済州道』（韓国学術情報、2007 年）、97 項
 - 36) ヤンオウンボ、『ネガティブ戦争』（コミュニケーションブックス、2009 年）9 項
 - 37) Downs, Anthony *An economic Theory of democracy* (New York: Harper and Law, 1957 年)、pp.22～30.
 - 38) KBS 済州放送・済民日報の世論調査、2010 年 5 月 19 日
 - 39) KBS 済州放送・済民日報の世論調査（2010 年 5 月 19 日の発表）では、経済活性化・雇用創出が 55%、地域均衡発展が 14.6%、ミカン産業活性化が 11.6%で、自治権強化は 6.7%に止まった。
 - 40) 済州日報世論調査、2009 年 9 月 30 日
 - 41) 金ジンホ・金ソンス、「済州道知事再補欠選挙（2004 年 6 月 5 日）の失敗要因分析」、『法と政策』、第 12 巻第 1 号、174 項

- 42) 済州道は2005年7月27日に済州道行政階層構造改編を住民投票を通じて2006年7月1日から特別自治道という特別な位置を付与された。既存の1道2市2郡体制を1道2市体制に転換し、2市2郡の基礎団体長(市長・郡守)・基礎議会選出制を廃止し、2市の団体長を道知事が任命する制度を採択した。
- 43) 済州開発公社が生産している水のブランド名である。
- 44) 中央選挙管理委員会ホームページ
- 45) 『済州のソリ』は6月3日の記事で、禹瑾敏は洞地域では負けたが、町村地域で圧倒的に勝利したことに注目、組織力に重きを置いて結果を分析した。一般的に農村地域は都市より動員投票がよく行われる地域であるとする研究が多い。
- 46) 当時のノムヒョン政権時代の与党で、今の民主党の前身である。
- 47) 中央選挙管理委員会のホームページ、
<http://www.nec.co.kr/>
- 48) 2010年5月3日、ハンギョレ新聞社の世論調査
- 49) 2010年5月3日、済州のソリ・ハンラ日報・KCTV 済州放送・済州 CBS 共同世論調査
- 50) 2010年3月30日、済州 TIMES・KONTV 共同世論調査
- 51) ヤンギルヒョン、「5.31 済州特別自治道知事選挙と候補公認過程」『平和研究』第17巻第1号、(2006年8月)、163～164項
- 52) 筆者がここで民主党・民主労働党・国民参与党間の反ハンナラ党の候補一本化が行われたとしてもそのインパクトに疑問を表すのは、単一候補を後押しする組織力がどの程度のものになる疑わしいからである。既存の世論調査でも、候補一本化にも関わらず無所属の玄明官と無所属の禹瑾敏間の両者対決構図には影響を及ぼしていないとされている。
- 53) 高喜範の支持率が20%の壁を超えず、11～18%くらいにとどまったことが明らかとなるにつれ、民主党支持層はより戦略的選択を考慮する方向に進んだ。
- 54) 5月19日に発表された4者対決の下で行われた調査では、禹瑾敏が40.3%、玄明官が14.7%、高喜範6.1%であった。この結果は、支持率よりも低く、支持層からにも当選可能性への期待感が低いことが分かる。5月3日の調査でも、高喜範の支持率は11.0%に比して当選可能性は4.0%にとどまった。

参考文献

<韓国語>

- ・ 김진호, 김성수, 「제주도지사재보궐선거의 실패요인분석」, (金ジンホ・金ソンス、「済州道知事再補欠選挙(2004年6月5日)の失敗要因分析」), 『法と政策』, 第12巻第1号、161～196項
- ・ 신형철, 『제주사회론』 (シンヘンチョル, 『済州社会論』) (ハンウルアカデミ、1995年)

- ・ 신형철, 「21 세기의 도래와 제주도민의 의식」 『제주사회론 2』, (シンヘンチョル, 「21世紀の到来と済州道民の意識」 『済州社会論Ⅱ』), (ハンウルアカデミ、1998年)、56～79項
- ・ 양길현, 「5.31 제주도특별자치도지사선거와 후보공천과정」 (ヤンギルヒョン, 「5.31 済州特別自治道知事選挙と候補公認過程」), 『平和研究』 第17巻第1号 (2006年8月)、157～199項
- ・ 양원보, 『네거티브 전쟁』 (ヤンウンボ, 『ネガティブ戦争』 (コミュニケーションブックス、2009年))
- ・ 양창윤, 『선거문화와 제주도』 (ヤンチャンユン, 『選挙文化と済州道』) (韓国学術情報、2007年)
- ・ 윤창주, 『투표참가와 정치발전: 우리나라의 정치실태』 (ユンチャンジュ, 『投票参加と政治発展: 我国の政治実態』) (ソウル大学出版部、1985年)、75～101項
- ・ 전용주, 「2006 지방선거의 정치적 의미」 (ジョンヨンジュ, 「2006 地方選挙の政治的意味」), 2006年4月6～7日ヨンセ大学国家管理研究院の2006年学術会議発表論文、75～76項
- ・ 전용주 외, 『투표행태의 이해』 (ジョンヨンジュ, 『投票行動の理解』) (ハンウルアカデミ、2009年)、45～187項

<日本語>

- ・ ジェラルド・カーティス, 『代議士の誕生』 (日経 BP 社、2009年) 25～192項

<英語>

- ・ Downs, Anthony, *An economic Theory of democracy* (New York: Harper and Law, 1957年)、pp.22～30.

<ウェブサイト>

- ・ 中央 SUNDAY <http://sunday.joins.com/>
- ・ 済州のソリ (インターネット新聞) <http://www.jeju.sori.net/>
- ・ MEDIA 済州 <http://www.mediajeju.com/>
- ・ 時事済州 <http://www.sisajeju.com/>
- ・ イシュー済州 <http://www.issuejeju.com/>
- ・ 済州日報 <http://www.jeju.news.com/>
- ・ 済民日報 <http://www.jeminu.com/>
- ・ ハンラ日報 <http://www.hallailbo.co.kr/>
- ・ ハンギョレ新聞 <http://www.hani.co.kr/>
- ・ ニュウシス <http://www.newsis.com/>
- ・ 東亞日報 <http://www.donga.com/>
- ・ 済州 MBC <http://www.jeju.mbc.com/>
- ・ KBS 済州 <http://jeju.kbs.co.kr/>
- ・ 中央選挙管理委員会 <http://www.nec.co.kr/>